



その9

片桐且元

—かたぎりかつもと—

(平成23年2月1日号—第271号)



片桐且元は安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した武将で、弘治2年（1556）、近江の浅井氏配下の小領主・片桐直貞[なおさだ]の長男として生まれました。

天正元年（1573）、浅井氏は織田信長により滅ぼされ、その後、且元は長浜城の羽柴秀吉に仕えました。

天正11年に秀吉が柴田勝家と争った賤ヶ岳[しずがたけ]の戦いで活躍し、加藤清正や福島正則らとともに「賤ヶ岳七本槍」[しちほんやり]の一人に数えられています。

秀吉の死後は秀頼を補佐し、徳川方との対立回避に尽力しました。

関ヶ原の戦いの後、秀頼は家運挽回を願い、畿内諸国で社寺の造営・修復を盛んに行いました。

このような背景のもと、片埜[かたの]（一宮）[いちのみや]神社（牧野阪2丁目）と二ノ宮神社（船橋本町1丁目）は、大坂城鬼門鎮護の社として、且元が奉行となって再建されたものです。

慶長7年（1602）、建築の片埜神社本殿は三間社流造[さんげんしゃながれづくり]で、極彩色の彫刻を施すなど桃山時代の建築様式がよく残り、昭和25年に国の重要文化財に指定されました。現在、平成23年9月までの予定で、桧皮葺[ひわだぶき]の屋根の葺きかえや彩色などの修復工事が行われています。



片埜神社本殿(牧野阪2丁目)



二ノ宮神社本殿（船橋本町1丁目）

一方、二ノ宮神社本殿は慶長8年の再建で、且元在判の棟札[むなふだ]が残されています。現在の本殿は正徳3年（1713）の建築ですが、慶長再建本殿の様式をよく踏襲したものと考えられています。

慶長19年、方広寺[ほうこうじ]の鐘銘を巡って豊臣・徳川の対立が激しくなると、且元は家康との交渉に奔走しますが、淀殿らから家康との内通を疑われ、やむなく大坂城を退去し、家康に味方することになります。大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、間もなく且元も世を去りました。